

源河亨著『知覚と判断の境界線：「知覚の哲学」基本と応用』

合評会

オーガナイザー・提題者：山田圭一（千葉大学）

提題者：源河亨（日本学術振興会）

染谷昌義（高千穂大学）

飯島和樹（玉川大学）

知覚の哲学は、経験科学における知覚研究の発展に呼応して、ここ最近の哲学のなかで多くの注目を集め、また、急速に研究が発展しているだと言っているだろう。本ワークショップが取り上げる源河亨氏（以下、源河）の著作『知覚と判断の境界線：「知覚の哲学」基本と応用』（慶應義塾大学出版会、2017年、以下「本書」と略記）では、分析哲学・現象学・経験科学のこれまでの知覚研究の動向を踏まえつつ、それらを美学や分析形而上学の議論と接続させる非常に興味深い試みが行われている。なかでも本書が取り上げているのは、厳密な意味で知覚可能なものはどれか、そして、どこかまでが知覚という心的状態に属し、どこからが知覚以降の心的プロセスなのか、という問題である。

本書の構成を簡単にまとめると、以下のようなものとなる。

まず「何が知覚可能なのか」という問題がどのような問題なのかを説明したうえで（第一章）、知覚に関して現代の知覚の哲学における諸問題と諸立場を簡潔にサーヴェイし（第二章）、それらの道具立てを用いながら種性質（第三章）・他者の情動（第四章）・不在（第五章）・美的性質（第六章）についての知覚可能性をそれぞれの領域固有の問題に即して具体的に検討するなかで「高次モード知覚説」という自身の立場を提示し、最後にこの立場が存在論と認識論に対してどのような影響を与えうるかを論じている（第七章）。

本書の中心テーマとなっているのは「高次性質は知覚可能か」という問いである。われわれが色や形などの低次性質に関して知覚可能だということについては（極端な懐疑論的立場をとるのでないかぎり）疑問の余地はないが、「犬である」といった種性質、「彼女は悲しんでいる」といった他者の情動、「音がない」といった不在、「優美である」といった美的な性質などといった高次性質については、それを知覚しているといっているのかどうか議論の余地があるだろう。これらは知覚の対象ではなく、解釈や推論といった認知的なプロセスの帰結とも考えられるからだ。

本書では、「高次モード知覚説」という独自の知覚理論を展開することでこの問題への回答を試み、とりわけ不在と美的性質について、厳密な意味で知覚可能であるという見解を擁護するというきわめて野心的な著作となっている。

さらにもう一つ本書の大きな特長として挙げられるのは、本書が以上のような問いに答えるだけで終わることなく、このような問いに答えることにどのような意義があるのか、という問いに対しても回答を与えようとしている点である。つまり、上記のような高次性質について知覚可能だといえることの哲学的な含意についても繰り返し考察を展開してお

り、その点を存在論への影響、認識論への影響という二つの方向から明らかにすることを通じて、知覚の理論を構築する際の規範についても提示しているという点で本書はメタ哲学的な考察の書にもなっている。

(内容紹介ページ：<http://www.keio-up.co.jp/kup/gift/chikahan.html>)

すでに述べた通り、本書では現代の知覚の哲学の知見を縦横無尽に駆使しているのみならず、知覚に関する多方面の知見が用いられているため、そこで展開された知覚理論、また、そこに至る考察を吟味するには、多面的な考察を行わなければならない。本ワークショップはこうした目的のもと、本書の意義や重要性、批判点を明確にすることを試みる。

ワークショップでは、まず源河が本書を概説し、次に、山田が認識論的観点から、染谷がエコロジカル・アプローチの観点から、飯島が神経科学的な観点から、それぞれ批判的検討を行う予定である。そのうえで、源河がそれらに応答し、会場からの質疑を受けるなかで、源河の提示する知覚理論の妥当性について検討するとともに、その応用可能性と発展可能性について幅広く議論していきたいと考えている。